

『論理哲学論考』のパラドックスにおける非決然的解釈の優位性

生田 隆芳

京都大学大学院 人間・環境学研究科

本発表はウィトゲンシュタインの前期著作である『論理哲学論考』（以降、『論考』と記す）をめぐる解釈論争を終結させるべく、伝統的解釈の立場から新しい解釈を批判し、あるいは反駁を加え、より優れた解釈とその方向性を示すことを目的としたものである。

本発表はまず『論考』における言語観を明らかにし、参照主義、論理分析、像理論、などに特徴づけられる言語の構造を説明する。次に、それに基づき、『論考』が「ナンセンス (Unsinn)」と呼んでいる命題をそれ以外の紛らわしい命題から峻別して特定する。『論考』が「ナンセンス」と呼んでいるのは命題が示している論理形式を語ろうとする命題のことであり、そして、その「ナンセンス」の定義に従って『論考』が如何に自己自身をも「ナンセンス」と否定し、パラドックスに陥るかを解説する。

続いて、『論考』のパラドックスに対する二種類の解釈を紹介する。一つは伝統的な解釈（「非決然的解釈」）であり、もう一つは比較的新しい解釈（「決然的解釈」）である。そしてそれぞれを『論考』の言語観や様々な命題と照らし合わせながら整合性を吟味するやり方で批判的に検討し、最終的にはそれらのうち、「非決然的解釈」（で古くからある方の解釈）を擁護し、「決然的解釈」（新しい解釈）はこれを棄却することとなる。本発表はさらに、『論考』のより妥当な解釈には後期作品との横断的解釈が必須であり、『論考』単独での健全な解釈には限界があることを主張する。本発表は、こうした主張によって近年の解釈論争に決着を付ける為の一助であることを狙ったものである。